

752-226



2

226

暹羅産ステイックの臺灣移植に就て

佐藤致孝述

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



752  
226

十三年八月十四日

佐藤致孝述

暹羅產クステイツクの臺灣移殖に就て

南洋經濟研究所

752  
246

### 暹羅産ステイツク・ラツクの臺灣移植に就て

佐藤致孝



昭和十三年七月中旬、大谷光瑞殿下、東京築地本願寺に御滞在の砌、筆者拜接、暹羅の産業に就て種々御高見を拜聴す。談會々暹羅産ステイツク・ラツクに及ぶ。殿下は「暹羅のラツクを臺灣に移植培養して見れば如何」との仰せ、成程御卓見なりと考へ折柄上京中の臺灣總督府殖産局長田端幸三郎氏を訪ひ殿下の御意見を傳へ移植可能性につき筆者の所見を述ぶ。田端局長は「近日臺灣へ歸任の上は早速暹羅に専門家を派遣し取調べさせて見る」と申さる。依て筆者は暹羅産ステイツク・ラツクに就き知れる限りを誌し田端局長の高見に供したり。今茲に南洋經濟研究所の好意に依り之を印刷に附し諸賢の御清讀を乞ふ次第なり。

(昭一三・八・三一筆者識)



暹羅産ステイツク・ラツクは暹語名トン・クラングと稱する樹木又は糖分多き樹林に寄生するラツク蟲の排泄物にて、ラツク蟲の産卵するを待ち採取する。

ラツクの幼蟲は孵化したる當時、深紅色にて微細、或種のものゝ蚤よりも小さい。初めは匍匐す

二  
るが成長するに従ひ樹枝に定着し、樹皮の軟き部分に針の如き吸口を突き入れ樹汁を吸ふ。斯かる間に幼蟲は暗褐色脂質の粘液を分泌して外殻を作り此の中に伏在する。雄蟲の外殻は楕圓形にて前方に二箇の穴を有し、雌蟲の外殻は球形にて前方に二箇、後方に一箇の穴を有する。雌雄共に其前方の穴より長い白色の蠟の如き糸を推し出し、其糸の爲に外殻は絨毛の如き觀を呈する。前方の穴は雌雄共に呼吸の用をなす。孵化して二箇月半も経過すれば雄蟲は前方の小穴より抜け出る。ラック蟲には有翅蟲と無翅蟲とがある。無翅蟲に幼蟲を近附けると幼蟲は忽ちにして喰殺される。無翅蟲は幼蟲よりも二倍半程の大きさがあつて躰の周圍に輪を有し且つ躰の後に針があるから幼蟲との區別が判然としてゐる。

雄蟲は外殻を出づると雌蟲の附近を飛び廻り或は匍匐し、雌蟲の外殻の後方の穴を利用して生殖作用を爲す。雄蟲は生殖作用を終ると間もなく死亡するも雌蟲は増々肥大して樹脂様の粘液を多く分泌する。之と同時に蜜の如き甘味ある汁を附近の樹枝、葉、地上等に排泄する。此の排泄物の上に一種の黑色の菌類が繁殖してラック蟲の寄生樹皮と同様な黒褐色を呈する。幼蟲の孵化する約二十日間前に至ると雌蟲は排泄を止めて産卵を始める。産卵が終ると死して躰軀は排泄物中にて乾固する。以上の如くラック蟲は幼蟲の孵化と共に一生を終り一年に生活を二回繰返す。幼蟲の孵化は大抵六月及十一月を普通とするが棲息の状態、培養の方法、寄生樹、培養樹等は地方によつて多少異なる。

近來、著しくラックの需要を増し米國向輸出が激増したので人工養殖盛んとなり其最も著名なるは東北暹羅の樞要地コーラット(盤谷を距る二六四軒)プタイ・ソングよりスリンに亙る地方と、北部暹羅ナコン・ランバーン(盤谷を距る六四一軒)より暹羅第二の大都會チェンブマイに到る地方とにて何れも高原地帯に培養されてゐる。東北産のラックはコーラット市に蒐集され、北部産はチェンブマイ市に集められ、而して盤谷に輸送取引される。

ラック蟲の養殖には主としてトン・クラングと稱する樹木を利用し植林してゐる。この樹は喬木にてラック蟲培養には好適なりと言はれてゐる。ラック蟲を養殖するにはラック蟲の排泄物たるステイック・ラックの附着せる樹枝を截り取りトン・クラング樹枝に結付け置く。然る時はラック蟲は孵化して全樹枝に擴り蕃殖する。

トン・クラングは樹幹濃褐色の滑らかなる樹皮に包まれ、樹皮面所々に小突起を有する。枝より綠色の樹葉延び末梢に桃色の花を着く。十一、十二、一月を除き四時開花し、六寸から九寸位までの長さ、一寸幅位の鈍豆状の實を結ぶ。外皮(莢)は暗褐色にて内部の豆は柿の實色である。

トン・クラングは東北暹羅地方都會にては街路樹として植林し、其最も顯著なるはコーラット市街より郊外、師團兵營に達する道路の兩側に整然として立ち並んでゐる。

ラックの用途は主として蓄音器のレコード、ワニス、封蠟、石版用インク、砥石、腕輪、玩具、糸絡、梭、電氣器具絶縁用等にて近來、米國向け輸出の激増と共に價格騰貴し在暹米人なども投資するに至つた。生産品は盤谷に於て取引されるが總出廻り高の一割が國內に於て消費され、殘餘はすべて輸出に充てられてゐる。今、一九三一年より一九三五年迄のステイック・ラック輸出數量、金額を示せば左の如くである。(一擔<sup>ピクル</sup>百斤、一銖<sup>パイプ</sup>一圓五十六錢)

一九三一年	二六、四九五擔	九〇三、〇二〇銖
一九三二年	一〇、〇八五	一八八、二〇六
一九三三年	五、八九〇	七六、四九六
一九三四年	七四、五〇九	一、〇〇八、二一五
一九三五年	一三〇、五三一	二、八〇六、六八七
五ヶ年平均	四九、五〇二擔	九九六、五二五銖

本業にて多少不安を感じる點は隣國緬甸が大量生産國たること、收穫は年によりて變化多く甚だ不確實なること、將來代用品發見されるれば本業は立所に衰退を來す恐れあることである。然らば日本人としては此の有利事業を如何に開拓するかに關し、大谷光瑞君下は「ラック生産地と略ぼ相似たる臺灣回歸線以南の高原地帯に移殖して見ては如何」と仰せらる。筆者も同感、臺南、高雄兩州

及臺東廳高原地帯はラック生産地方たる東北部及北部暹羅四州、所謂ラオス高原地帯と氣候風土は大體相似せるを以てトン・クラング及ラック蟲の移殖は必ずや成功すべき事と信ずる。

今、暹羅大藏省發行一九三五年版(最新刊)暹羅王國統計表(五一頁—五五頁)及臺灣總督府發行昭和十一年版臺灣事情(第二節氣候)に據りてステイック・ラック生産地方と臺灣南部三地方との氣温及び雨量を比較表示すれば左の如くである。但し暹羅各州別氣温の信據すべき統計を得られざるに由りチエングマイに於ける一九三四年の氣温數字を掲げる。

暹羅北部チエングマイ及臺灣南部、臺南、臺東、恒春三地方平均氣温比較表  
(攝氏—累年平均)

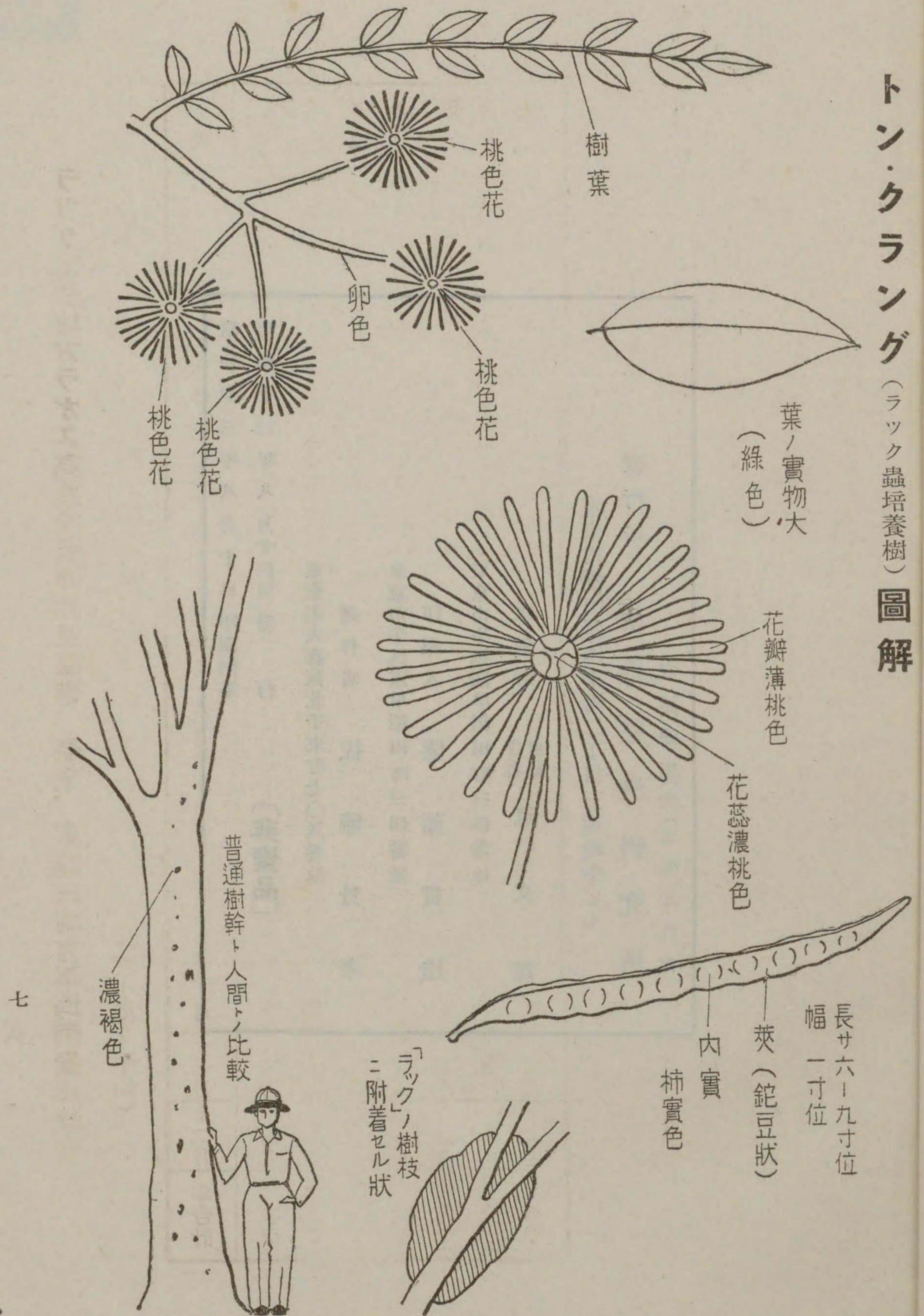
地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	五個年平均
チエングマイ (一九三四年)	二二・三	三三・一	三六・九	二六・三	二九・三	二六・〇	二六・八	二六・八	二七・〇	二六・〇	二四・二	一九・一	二五・六
最高	三三・〇	三四・〇	三九・〇	三九・〇	四〇・〇	三七・〇	三五・〇	三五・〇	三五・五	三四・〇	三一・〇	三三・〇	四〇・〇
最低	八・五	一一・五	一四・〇	一九・五	二〇・〇	二二・五	二二・〇	二二・六	二二・〇	一八・五	一四・五	六・〇	六・〇
臺南 (一九三一—三五年)	一七・〇	一六・九	一九・六	二三・三	二六・二	二七・三	二七・八	二七・四	二七・〇	二四・七	二二・五	一八・四	二三・一
臺東	一九・〇	一八・九	二〇・七	二三・二	二五・二	二六・九	二七・四	二七・三	二六・四	二四・四	二二・〇	一九・九	二三・四
恒春	二〇・四	二〇・四	二三・二	二四・六	二六・四	二七・三	二七・五	二七・二	二六・七	二五・二	二三・三	二二・三	二四・四

ラツク生産地方ラオス高原地帯四州及臺南、臺東、高雄三地方平均雨量比較表

(耗—累年平均)

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年合計
（一九二九—三三年） パヤツン	四・七	六・〇	一五・六	六〇・一	二九・〇	二九・七	三九・一	二三・〇	二九・九	七五・九	一一・〇	四・七	一、五八・三
ウダ	二・五	二八・一	二八・六	四七・九	三一・八	一八・七	二六・二	一九・六	二四・三	四八・一	二六・三	四・一	一、九四・四
ピサヌローク	二・九	三八・二	二九・四	八一・三	一六九・六	一三二・七	二二七・六	一八〇・五	二四六・三	九八・二	一一・三	〇・五	一、五八・九
ナコンラーチャ・シーマ （一九三二—三五年）	一・四	三七・一	三四・六	六六・二	一四三・一	一七二・七	二六・三	一九三・九	二四五・四	一〇六・八	一六・八	一・七	一、三四二・一
臺南	二〇・〇	三六・〇	四四・〇	六七・〇	一七七・〇	三三九・〇	三八〇・〇	四三三・〇	一六四・〇	三二・〇	一七・〇	一五・〇	一、七五八・〇
臺東	三六・〇	四三・〇	六二・〇	七三・〇	一八三・〇	一八九・〇	三六二・〇	三三三・〇	二八七・〇	一七六・〇	五五・〇	三七・〇	一、八二二・〇
高雄	一三・〇	二一・〇	三三・〇	五八・〇	一九五・〇	三〇六・〇	三三八・〇	四三二・〇	一六〇・〇	三四・〇	一六・〇	九・〇	一、六四〇・〇

トン・クラング (ラツク蟲培養樹) 圖解



752  
226

昭和十三年八月十日印刷納本  
昭和十三年八月十四日發行

〔非賣品〕

東京市大森區北千束町七〇八番地

著者 佐藤致孝

東京市牛込區早稻田町三四番地

印刷人 權藤貫造

東京市牛込區早稻田町三四番地

印刷所 合名 双文館

東京市麴町區內幸町二丁目三番地幸ビル

發行所 南洋經濟研究所

電話銀座(57)三五五六番

752  
226



